

8 家 庭 科

須 崎 恵 子

1 家庭科と自立

子どもたちが生活している家庭や社会は、高度情報化、国際化、高齢化など大きく変化しており、今後もますます大きな変化に見まわれることが予測される。このような大規模な社会の変動に対応し、主体的に生きていくためには自ら学び自ら考える力の育成と基礎的・基本的な内容の定着、個性を生かす教育が不可欠であると考えます。

新学習指導要領の家庭科の目標においてもこれまで以上に「体験的な活動」を重視している。それは、最近の子どもたちの実態として疑似体験や間接体験が多くなる一方で、生活体験・自然体験が乏しく、家事の時間も少ない子どもたちが多い傾向にあるためである。家庭においても家電製品の普及に伴い生活が便利になり、以前ほど体を動かして働かなくても快適に過ごすことができるようになってきているので、子どもたちが家事に参加する機会も減っている。また、家族数も減り、地域との交流も希薄となっているので人と関わり合いながら生活することも少なくなっている。そのため、基本的な生活技能や勤労観の体得、人との協調性などについて修得することが難しく、自立が遅くなっているとも言われている。

家庭科学習においては子どもたちに家庭生活に関する基礎的な知識・技能を身につけさせることによって、主体的・能動的な参加を促し自立へ向かう子どもたちへの援助としたと考えている。

2 自立を育む家庭科の授業

子どもたちが主体的・能動的に生活に参加し自立に向かっていくためには、日常生活に必要な基礎的な技能を身につけると共に、その技能を実践する喜びを味わい、家庭生活をよりよくしようとする態度を育てなければいけない。そのためにはまず、技能を教え込むのではなく子どもたちなりに工夫し試す等、操作する段階を大事にしたい。そうすることによって家庭科で学習してことを生活のどの場面でどのように活用すればよいか分かり、学習したことを生きる力とすることができると考える。また、子どもたちの生活を見直させ、自分がかげがえのない家族のために何ができるか考えさせる。そして子どもたちなりに家庭生活に関われることや、生活をよりよく変えることができることを試行錯誤させながら考えることができるような授業を設定する。このように主体的・能動的に一人一人の課題に取り組む過程で考えたり工夫したりすることで子どもたちに自立的生活能力を身につけさせたい。

3 家庭科でめざす子ども像

上記のようなことをふまえて、目指す子ども像を次のように設定した。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①家族の一員としての自覚を持ち、自分にできる役割を進んで果たす子ども②社会の変化に伴って生じる生活の中の課題を見つけ自分なりに解決していこうとする子ども③自分と周りの人々や社会との関わりを見つめお互いに助け合ってよりよい生活をしていこうとする子ども |
|--|

4 人やものに関わることを大切に学習とするために

家庭科では「家族」を源として「人とのかかわりあい」を学ぶことを大切にしていきたい。自分の生活は様々な人やもの（環境）の中で支え合い成り立っていることを理解させ実践させたい。自分から家庭へ主体的に関わったり働きかけていくことでその子らしさも発揮できる。できるだけ「かかわる」機会を作り、子どもたちが自主的に活動できる場面を多く設定したい。また、その際他との関わりの中で自分をどう生かしていくことができるのかについて考えさせたい。授業においてはお互い学び合う中で、自分とは異なる意見や友達の思いの良さに気づかせていきたい。

5 自立へ向かう子どもたちを育む家庭科の授業の具現化に向けて

(1) 家庭生活及び家族に対して「関心」を高める。

衣食住などの実践的・体験的な活動を通じて、子どもたちに生活実感をもたせ、家庭生活への関心を高めさせる。とかくすると、子どもたちはだれかに何かをしてもらって生活しているという事実を意識し感謝することが希薄になりがちである。子どもたちなりに自分の生活や家族にことを意識して生活していくようにさせたい。

(2) 体験的学習を取り入れる

少なくなっている子どもたちの生活経験を補っていけるよう一人一人が実際に自分の手を動かし、体を使って体験できる場の設定が大切である。これは技術面だけでなく思考面でも同じことが言える。学習の中で試行錯誤を繰り返しながら学習を深めさせていきたい。

(3) 家族の一員として学ぶ立場を重視する

家族の中でのコミュニケーションが少なくなると家庭への所属感が薄れてきていると言われている。家庭科ではまず、家族の一員としての自覚を持たせ、意識づけることが必要であると考え。さらに、自分と家族との関係から、近隣の人々との関わり等に発展させ、共に生きることの大切さを学ばせたい。

(4) 生活を工夫する実践的態度を育てる

家庭科の題材は生活の中にある。日常生活をよりよいものにするために自分はどうすべきかを考えさせ、子どもたちなりに生活を工夫する態度を育てることが大切であると考え。

そこで、自分の生活や家族の生活を観察させ、生活への関心を高めるようにする。また、子どもたちが持っている自分や家族の生活がこうあればいいなという願いを生かすために、課題を設定させ、その問題解決を通して生活を創意工夫する力を子どもたちに育てる必要があると考える。授業では、子どもたち一人一人の考え、方法を大事にし、基礎的・基本的な生活の技能を身につけていけるようにしたい。

(5) 人やものとのかかわりを大切にする

家庭科では家族やまわりの人たちとのかかわりだけでなく、生活に必要なものとのかかわりについても大切に考えていきたい。子どもたちは多くの物に囲まれて生活をしている。ごみや不用品の適切な処理の仕方を学ぶことによって人とのかかわりを大切にするだけでなく、ものとのよりよいかかわりかたについて考えを深めることができるようにしたい。

6 成果と課題

家庭科がめざす「自立」について「人やものとかかわりをもととする姿」から考えてみたい。

〈成果〉

(1) 人とかかわり

子どもたちの生活の基盤となっている家庭や地域と自分とかかわりを見つめ、家族や地域の人たちが気持ちよく生活していくことができるよう自分にできる役割を積極的に果たしていくことが家庭科において人とかかわりからとらえた自立であると考えられる。

今、自分たちが生活している家庭での姿を見つめどうすればよりよい気持ちよく生活することができるかについて考えてみた。ただし、直接的に自分の家庭生活に言及するのは難しい面もあるので、ロールプレイを取り入れることでより自然に自分の思いを発表やワークシートに表現することができたように思う。

自分の部屋を掃除し、出たごみや不要品を適切に処理することを学ん後は家族が共に使う共用部分の掃除にも目を向け自分にできる仕事の分担を果たしていき、家族と共に気持ちよく生活するのも家族との大切なかかわりかたであると考えられる。

(2) ものとかかわり

人が生活するには数多くの物を必要とするが、子どもたちも多く物を使いながら生活している。ものを大切に使うという言葉はよく聞かれるが具体的にはどのようにすることなのかはっきりとはわかっていない児童も多かったが、今あるものは最後まで大切に使い切ることや、つかえなくなったものはリサイクルしたり再利用すること、またごみはきちんと分別することなどであることがわかり、それを自分の生活に生かしているという態度をみることができた。

〈課題〉

自分や家族の生活を振り返る中で、気持ちよく生活していくには住まいをきちんと掃除をし、不用品やごみを適切に処理することが大切であると理解することができたが、さらに対象を広げ近隣の人々とかかわりについても見直すことが大切であると考えられる。

自分たちが生活している地域での生活を見つめ直し、家族や地域の人々が気持ちよく生活する方法を見つけ実践していくことができるようさらに学習を深めたい。